

## 幼児教育において

## 「遊び保育」は本当に可能なのか

小川博久

幼稚園教育要領の改訂において「遊び中心の保育」の重要性が今回確認されるとすれば、幼少の関連が重視される状況の中で、幼児教育の独自性が確認されたことになり、安堵すべきことだと思っている。

しかし、よく考えてみれば、この安堵は一瞬の思いでしかないとも思う。なぜなら、幼児の遊びを尊重するとか大切にするということは、考えてみればみるほど、簡単に了解できることではないからである。事実、教育要領の文言とは裏腹に、幼児の遊びは、実態としても、われわれの日常的現実から姿を消しており、建前とは別に、大人の知識を教授したがる人たちが教育関係者の中にも増加している。そして「遊び」といわれる文化さえも、教えなければ伝わらないと信じる保育者も多いのである。逆に、子どもの遊びに干渉すべきではないとする原則を盾にとつて、放任をほしのままにし、結果として「真面目な」教育関係者のひんしゆくをかってしまう例も少なくないからである。



今夏、スウェーデンのウプサラ大学で教育学者たちと「遊び研究のセミナー」をもったとき、欧米の研究者間で著名な遊びを研究している社会学者がフィールド・ワークで幼児のごっこ遊びの研究事例を極めて実証的に報告していたのには、感心させられた。その反面、それらの事例報告が、遊びの仲間の中でどう主導権を取るか、好きではない仲間をどう遊びから排除するかといったものであることに疑問を覚えた。たとえば、ある女の子が、一緒に遊びたい相手には「あなたと、私は同じ年で生まれたのね」と言い、遊びたくない幼児には、「でも、あなたはまだ生まれてなかったのよ」といった言い方で排除しようとするのだという事例であった。確かに、こういう事例はあるだろう。しかし、保育者の立場からすれば、遊びはまずは楽しいものであり、楽しさを共有することでますます人間関係が豊かになっていくものである。楽しさの共感や、そして時には、つらいという気持ちの波長を共有することこそ、遊びを見るまなざしであり、援助であろう。もちろん、そこに前述の社会学者が認める現実があるとしても、ここには、大人と子どもの区別を越えて共感する世界がある。今、そのことができる大人が少なくなっている気がしてならない。子どものころ、遊ぶ楽しさを知らなかったり、忘れてしまっている大人が増えているからである。

こんなことを考えていると、保育の中で遊びを尊重するという言葉の困難さがあります。ますます大きくなっていく。『遊びの現象学』（勁草書房）を著した西村清和はぶらんこで遊ぶことを例にとつて、「遊び」の本質は緊張と解放の宙づり感を味わうことだと述

べた。幼稚園の砂場には人生経験のすべてが詰まっていると、フルガムは言っている。こうした遊びのとらえ方は、学校で教えることと、大きく異なっている。近代学校は大人の社会の望ましき価値を教えることを基本としている。良き価値を子どもが学んだかを見極める仕事教育評価である。中央教育審議会の委員で幼児教育を専門にしているある心理学者が、教育評価が困難なことを理由に遊びを幼児期に取り入れることに疑問を呈していた。この反応は、小学校教育の立場からの遊びへの疑義であることは明らかである。しかし、良き価値への到達度をより明確にしようとする学力テストによって、子どもたちの成績を数値上に配列化する学校文化が学校社会を支配することは、子ども社会を幸福にするだろうか。地位の高い人が必ずしも良きことをするとは限らず、むしろ、その人たちこそ世の中に悪事が通用するという悪臭を振りまいていて、子どもたちも確実にそれをかいでいる。昨今、学校文化だけが建前として、良き価値だけを教える場であるとして涼しい顔をしていられるのであろうか。結果として、欺まんをさらすことになっていないだろうか。

学校が子どもたちに人生を学ばせる場になることができると思う。もし、学校の中で遊びが子どもたちの文化として育つことができれば、学校は子どもたちに人生の楽しさとつらさを擬似的に体験させてくれる場になると思うのである。キャサリン・ルイスは、日本の同窓会に注目し、日本の小学校の学級文化を高く評価した。私にとつて、成人して小学校時代の級友と会うのは楽しいことだ。それは、成績の上下があ



り、時にけんかの思い出もある中で、懐かしさの源泉が遊び体験にあったと思うからである。その思い出だけは消えていないからである。

鬼ごっこで追いつ追われるスリルを味わいつつ、つかまえない、つかまえたくないという緊張の中でつかまえた（つかまえられる）瞬間の解放感、鬼と子の間に潜在している仲間意識（親しさ）の感覚のゆえである。このアンビバレンツな経験こそ遊びの楽しさである。近年、運動会の騎馬戦で敵の騎手の防止を激しく奪い合わず、お互いに逃げ合って、残る帽子の数を競い合う姿を見るにつけ、遊びの楽しさを共有し合わない若者たちの希薄な人間関係を悲しく思うのである。それに引き換え、昨夏の全国高校野球選手権での佐賀北高の優勝は、普通の県立校の優勝ということで、野球を楽しむ高校生にとって人生を学ぶ良い機会になったのではないだろうか。私のフィールドにしている幼稚園で、お互いに張り合っている五歳男児がボス同士として激しい口論でけんかをしていた。数十分後、バツの悪さに口はきかないけれども、いつの間にかお互いに気づかず自然と接近し合っている姿があり、とても印象的であった。全く接触しなくなるのは寂しいのではないだろうか。幼児の遊びが、楽しさも、時に悲しさも味わいつつ、仲間であるという集団規範を身につける大切な機会であるとするれば、そうした人生経験的体験が身につく営みとして、遊びを保障し、共感する保育者をどう養成できるのだろうか。それが私の悲願であり、課題である。

（聖徳大学）